

水彩 Technique。



メディウム！

水彩でも油絵のような技法を駆使したいというアーティストが多い。ホルベインは新たに11種類の高品質な水彩用メディウムを発表します。絵具の透明度を高めたり、にじみを抑えたり、画面にきらめきを与えたり、紙のはじきを抑えたり、白抜きをしたり、部分をマスキングをしたり、どちらかといえば保守的なイメージの水彩が変わっていくはずです。

<ホルベイン水彩用メディウム シリーズ> オックスゴール/サイジング リキッド/ウォーターカラーメディウム/アラビアゴム メディウム/アラビアゴム ベースト/イリデッセント メディウム/マスキングインク/マスキング インク クリーナー/水彩画 保護ワニス/UVグロス パーニッシュ/UVマット パーニッシュ

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03(3983)9251 大阪府東大阪市土小阪1-3-20 TEL.06(6723)1554



holbein

www.holbein-works.co.jp

holbein

松江泰治

鷹見明彦^{II}文 森田兼次^{II}写真^{*印}

地名に表された世界を集めに



1987年、東大病院の外科病棟にて。ツアイト・フォト・サロンで初個展を開いたが、同年の秋、バイク事故で大腿骨を骨折。塞栓症を併発する重体で60日間入院。生還した



1985

「写真は2次元なのだから、
被写体を平面に
もどしてあげなくては」

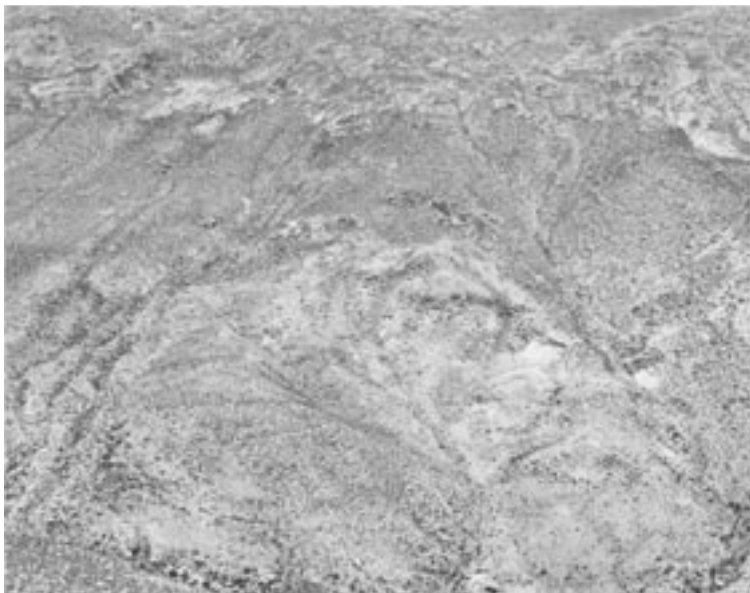
無題 1985
ゼラチン・シルバー・プリント

東京・浜松町の世界貿易センタービル。地上40階の展望台には、高層ビルの建設ラッシュで変貌はげしいTOKYOのパノラマが広がる。「ここは、東京の高層ビルの展望台では、2番目にできたところ。以前からよく来ていて、最近の都市の写真でも、撮影ポイントにしました。」

世界各地の地表を精密に撮らした作品で知られる作家は、高度成長期のアキハバラで自作の電子回路の部品を求め、電子少年の一人だった。「論理が正しければ、見えない電子が作動するのは、神秘的だった。夢といえば、エサキ・タイオドでノーベル賞をとった江崎玲於奈博士のような物理学者になること。」

「家庭の事情で家にはいたくなかったので、小学生のころから休みには一人で旅ばかりしていた。ヒッチハイクや無銭旅行に挑戦したり……。綿密に計画を立てるのが、楽しかった。」

写真は、中学、高校と撮ってはいいたが、暗室作業の化学実験的なプロ



1995

「1日500キロ走って、1000キロに1枚撮せる場所がある。
空や水を写さないのは、固体のほうが、きちんと光を反射するから」

セスに関心があった。物性物理か電子工学がやりたくて、1982年、東京大学理学部へ進学。

「大学で知り合った友人たちの影響で展覧会を観るようになって、当時の西武美術館や原美術館、銀座のギャラリーなどには、よく行った。自分が写真で現代美術とどうリンクできるか、本を読んだり友人と議論して考えたり」。

ある日、大学の生協で手にした1冊の写真集に衝撃を受ける。

「森山大道の『光と影』。視覚と触覚が強く結びついた写真に惹かれて、森山さんに会いに行ってしまう」。

渋谷のアパートに毎月、街を歩きまわって撮った写真を持参した。「作品は、いつも、後で観ておくから置いていけ」と言われて、ずっと何も言ってもえなかった。半年経ったとき、「写真はやめて、アルバイトでもしたほうがいい」と言われて、続けるなら、ぜんぶ捨てて、見つめ直せよ」。



ATH 0106 2001
ゼラチン・シルバ
ー・プリント

大学では、ランドサットの衛星写真の画像処理に取り組んだ。宇宙から見た写真をデジタル的につくっていく作業は、カメラを持って地上を歩きまわって写真を撮るのとは、対極のようでありながら、考えることと、そのプログラムをつくるプロセスをくり返して写真ができるという次元では、等価だと思っ



2004 「地名として記された場所に身体を運んで、世界を採り集めてくる それが自分の存在証明」

《無題》(1985)は、ツァイト・フォト・サロンでの初個展の出品作。「階段は、よく撮った。写真は、2次元なのだから、被写体を平面にもどしてあげなくては。なるべく影や奥行きが出ないようにして。」

「人の眼も写真も、表面以外のものは映らない。だから表面以外のものを撮そうとは思わない。」

初個展を開いた同じ年の秋、夜、バイクで走行中に信号無視のタクシ―と衝突し、大腿骨を骨折、塞栓症（血栓性塞栓症）を併発する重体で、2か月間の入院から生還した。地理学科の卒論の評価は高かったが、写真の道を行くと決めて卒業。

《ANDES 1995 #14》(1995)は、90年代とともにスタートした海外撮影から生まれた1点。「撮影は、いつも車で1日500キロ走って、1000キロに1枚撮せる場所がある。撮影ポイントを探すのではなく、走っていると向こうからやってくる。」

「太陽が正面にきて、被写体に影

ができない時間に撮ります。空や水をほとんど写さないのは、固体のほうがり、きちんと光を反射して表面を正確に撮せるから。」

砂漠、山岳、畑地、森林、辺境の村や町……。地名をタイトルとするこれらの写真は、地表のテクニカルを撮し取りながら、均質に集められた世界地図の部分のように見える。「世界がひとつの表面である」という事実。地図に地名として記された場所に身体を運んで、世界を採り集めてくる。それが自分の存在証明。」

2001年には、90年代の作品を集めた作品集を出版。翌年、木村伊兵衛写真賞を受賞した。

《ATH 0106》(2001)は、2001年から制作をはじめた都市の写真の1作。「都市の作品のタイトルは、すべてIATA国際航空運送協会のシティ・コードです。ATHは、ギリシャのアテネ。」

「都市では、ビルや塔からの撮影が多いので、撮影許可の問題は、風景

浜松町の世界貿易センタービル展望台にて。地上150メートルのこの場は、作家の撮影スポットのひとつ。前ページのスロバキアでのカットを含む『In-between 7 松江泰治 イギリス、スロバキア』(2005年、EU・ジャパンフェスト日本委員会=発行、オシリス=刊)は、日本の現代写真家13人がEU加盟国を撮り下ろすプロジェクトの1冊として刊行されている*]



まつえ・たいじ 1963年東京生まれ。87年東京大学理学部地理学科卒業。96年、第12回東川賞新人作家賞受賞。2002年、第27回木村伊兵衛写真賞受賞。主な個展に87、92-99年ツァイト・フォト・サロン(東京) 93年イル・テンポ(東京) 99年スタッフ・ギャラリー(ニューヨーク) 99、2000、02、03年TARO NASU GALLERY(東京)、01年コオジ・オグラ・ギャラリー(名古屋)、01、03年L.A.Galerie(フランクフルト、ドイツ) 05年モイラント城美術館(ベドブルグ・ハウ、ドイツ) 主なグループ展は、94年「液晶未来(フルーツ・マーケット・ギャラリー、エジンバラ、イギリス) 95年「アナザー・リアリティ(川崎市市民ミュージアム、神奈川県)」 「モノ・カオ・反物語(東京都写真美術館) 96年「インプリケイト・オーダー」(ギャラリー美遊、東京) 98年「写真の現在-距離の不在(東京国立近代美術館フィルムセンター) 01年「SURFACE(オランダ国立写真美術館、ロッテルダム) 03年「解像度(表参道画廊+MUSÉE F、東京) 04年「アルル国際写真フェスティバル(フランス)」「オフィチャー・アジア(ポロニア近代美術館、イタリア)など、2006年1月、ヴァンダ彫刻庭園美術館(静岡県長泉町)で、個展が開催される予定。

も公共のものではないことを痛感させられる。とくにテロの時代の近年は。『SK 2004 BS』(2004)は、作品としては初めてのカラープリントによる最近作。EU諸国を紹介

介する写真集のために撮り下ろした1点。イギリスとスロバキアを撮影して、こは、世界遺産でもあるスロバキアの鉱山の町。現在は歴史博物館になっている城の最上階の窓から撮りました。年間200日ぐらい暗室作業をしてきた僕にとつて、外注でカラープリントを仕上げるのは画期的な出来事。本になって、はじめてディテールを観て、ますます写真家は、観る者の一人という観念が強まる。

走行距離、約50万キロ。集めた地名の写真、500点。衛星カメラと監視カメラに被われた地上で、個人の力の限界を試すように、精緻な世界地図の製作はつづく。無人の探查衛星と太陽を追って砂漠に消えた詩人の沈黙のあいだに、この星の表面にも、いまだ多くの世界が、まなざしを待っている。

たかみ・あきひ(美術評論家)
8月9日、東京・浜松町、世界貿易センタービルディング展望台にて取材